人の世はおもしろや凸と凹

〈登場人物〉

八郎
ツル
オヨネ
吾助
村の若者Ａ
村の若者Ｂ
村娘Ａ
村娘Ｂ
殿様
腰元ａ
腰元ｂ
腰元ｃ
腰元ｄ

1

吾助　しかし、まこと縁というものは、わからねえものだな。

オヨネ　ほんとに、わしもまだ信じられないよ。あんなきれいな娘が、八郎のところへ嫁にくるなんてさ。

吾助　何を言ってる。そもそも、この縁を取り持ったのは、オヨネさん、おまえさんじゃないか。

オヨネ　そりゃそうじゃが、わしは隣村の知り合いにいい娘がいるからどうかと頼まれて、そのまま引き合わせただけだ。

若者Ａ　オヨネばあさん、なんでそれが俺のところでなくて、八郎のところなんじゃ。

オヨネ　そりゃ、しかたなかろう。わしは八郎の親代わり。あれの母親に、死ぬ前に倅のことをどうかお願いしますと頼まれた。

若者Ｂ　ああ残念無念、うちのお袋はいやに

なるほど丈夫で、当分死にそうもない。

オヨネ　何を言うか、この罰あたりが！

吾助　わしはな、もしかするとこの娘は狐かなんぞで、八郎をたぶらかすもりじゃないかと思っとった。

オヨネ　吾助さん、狐はひどいぞ。

吾助　それもツルなんて名前だものな。わしは聞いたよ、おい八郎、おまえ、いつぞや罠にかかった鶴でも助けたことがねえかいって（笑）

オヨネ　狐でも、鶴でも、天女でもねえ。正真正銘の人の子だから、この縁は不思議というものさ。あんな器量よしなら、それこそひくてあまた。あとから聞いた話じゃが隣村の庄屋の倅もずいぶんご執心だったというぞ。

吾助　それがどういうわけか、この村でも一二の貧乏百姓の嫁になった。

若者Ａ　八郎がとびきりの男前というなら、納得もする。

若者Ｂ　そうだ、ありゃあ、お世辞にも男前なんて言えるもんじゃねえ、どちらかというと間抜け面のあほ面だ。

吾助　おまえたち何だ。妬いとるのか。妬くな、妬くな、みっともないぞ。

若者Ａ　じいさん、これが妬かずにいられるかい。考えてもみてくれ。金もねえ、色男でもねえ、といって知恵があるわけでもねえ。まるであたりめえの、いや、あたりまえ以下の八郎のやつのところに、なんで、なんであんなきれいな嫁がくるんだ。

若者Ｂ　それでもまだその嫁が、器量よしだがひどく怠け者だとか、性悪だとかいうのならともかく。

若者Ａ　人一倍働き者で、そのうえ気立てもいいとくる。

若者Ｂ　まったく、腹が立つったらありゃしない。

村娘Ａ　ほんと、腹が立つ。

吾助　おいおい、おまえたちは何が気にくわないんだい？

村娘Ｂ　ツルさんが八郎さんのところへ嫁にきたおかげで、わたしらも、えらく迷惑こうむってる。

吾助　そりゃあ、いったい、どういうことじゃ。

村娘Ａ　村の若い衆が、みんな、ツルさんのような嫁がほしいっていいだした。八郎にもらえて、おれたちにもらえねえわけがねえって。

村娘Ｂ　おかげで、わたしらなんぞには目もくれねえ。どいつもこいつも、身のほど知らずの高望み。

村娘Ａ　そうそう、身のほど知らずだ。

若者Ａ　身のほど知らずとは何だ。じゃあ、八郎はどうなんだ。

村娘たちが、若者たちを責める『自分のことは棚に上げ』の歌。

自分のことは棚に上げ
棚からボタモチ待っている
図々しいとはそのことさ
鏡を貸そうか　ひきどんに
たらたら流れる恥の汗
たまって流れる面のかわ
蛙のしょんべん　ちょちょぎれる

若者Ｂ　蛙のしょうべんだ！　何をいいやがる。この唐変木め、やっぱりその目は節穴かい。俺たちゃ、たとえるならば。

若者Ａ　たとえるならば杉の木だ。まっすぐのびて天を衝く。（芝居がかって）

若者Ｂ　たとえるならば松の木だ。見事な枝ぶり、男ぶり。

若者Ａ　ミンミン鳴いてもとまらせねえぞ。

いくら突いても返事はせぬぞ。

自分のことは棚に上げ
棚からボタモチ待っている
情けないとはそのことさ
まるで日向の　雪だるま
とけて流れる恥の汗
やせて流れて面よごし
手も足も出ぬ　おたんちん

若者Ｂ　おたんちんだと、このおたふく！
村娘Ｂ　ひょっとこ！
オヨネ　もういい、もういい、やめとくれ。そりゃあ、八郎とツルのことはわしらも驚いたさ。いまだって、何かの間違いだって思わないでもない。じゃがなあ、理屈にあわないことが起きるのが、男と女の仲。なあ、吾助さん。
吾助　そうさ、オヨネさんの言うとおり。男と女の仲というものは、昔からおかしなものさ。

オヨネばあさんと吾助じいさんが歌う
『不思議なものさ、縁というものは』

不思議なものさ　縁というものは
とりわけ　男と女の縁は
結びの神はきまぐれだから
もつれたり　からんだり
なかなか回らぬ　糸車
ああ
だから人の世はおもしろい
人の世は出会い
凸と凹との出会い

若者Ａ　ワレ鍋にトジ蓋。
村娘Ａ　似たもの夫婦。
若者Ｂ　猫に小判。

村娘Ｂ　豚に真珠。

二番は二人に村の若者、娘たちも加わって。

不思議なものさ　縁というものは
そもそも　男と女の縁は
結びの神はいたずらもので
ほどいたり　つなげたり
くるくる回らぬ　糸車
ああ
だから人の世は泣き笑い
人の世は出会い
凸と凹との出会い

歌の終わりとともに、バックの薄い幕があがる。

八郎の家。家の中で忙しく立ち働いているツル。そのツルにまるで小さな子供のようにまとわりつく八郎。

睦まじい二人のようすをしばらくみているオヨネ、吾助、村の若者、村の娘たち。

若者Ａ　へっ、まったくみていられねえ。

若者Ｂ　ああ、八郎はいいなあ。

うらやましそうに見ている若者Ｂをひきずるようにして若者Ａ退場。続いて娘たち、最後にオヨネ、吾助も退場。

ツル　もう、おまえさんたら、いい加減にしてちょうだい。いったいいつまで、そうしているつもり。

八郎、にやにやしながら、頭をかく。

どうにもしまらないようす。

ツル　そうやって一日中、わたしの側にいるのはいいけれど。このまま田んぼや畑をほうっておいたら、お米も野菜もとれやしない。しまいには二人ともご飯が食べられなくなってしまうわ。

八郎　しょうがないんだ、どうにも気になって、仕事に手がつかない。ツルは今頃何をしているんだろう。俺がいないあいだにどこかへいってしまうんじゃないか。そう思うと、いてもたってもいられなくなる。

ツル　心配しなくても、わたしはどこへもいかないわ。

八郎　ほんとうのところ、俺にはツルがこうしてここにいてくれることすら、いまだ信じられないのだ。朝、起きるたびに、夢でなかったかと不安になって、おまえをさがす。

ツル　わたしはどこへもいかない、おまえさんが追い出さないかぎりね。

八郎　俺がおまえを追い出す！　とんでもねえ、とんでもねえ話だ。俺はそんなこと爪の先、いやいや針の先ほども考えたこともねえ。

ツル　わからないわ、これからいやになるかもしれない。

八郎　いやになんかならねえ、絶対にならねえ。

ツル　小言ばかりいう、しわくちゃのばあさんになっても？

八郎　ツルはそんなのにならねえさ。

ツル　そうはいかん。誰だって歳をとればしわくちゃになるよ。

八郎　そうかもしれんが、俺だってしわくちゃのじじいだ。おあいこだ。俺は、俺はなツルがたとえ、しわくちゃになろうが、腰が曲がろうが、ずっと一緒にいるんだ。ず

っと一緒にいるんだ。

ツル　わかった、わかった。わかったから。

子供のようにとりすがる八郎を母親のようになだめるツル。

八郎　おふくろが死んで一年、一人暮らしも不便だろう、探せばおまえのところのような貧乏所帯でもかまわぬという物好きもいるやもしれん。オヨネばあさんがそういってあちこちへ声をかけてくれた。八郎、そのかわりぜいたくいうな。すこしくらい顔の造作が悪かろうが、歳をくっていようが文句いうなよ。いろいろ塩梅悪いことがあっても、そのうち慣れるもんだ。夫婦なんてそんなもんだ。ばあさんにいわれるまでもねえ。選り好みができる身分かどうか、自分が一番知っている。だから、ばあさんに言ったんだ。どうかよろしくお願いします。ぜいたくはいわん、ただ……。

ツル　ただ？

八郎　ただ、できたらオヨネばあさんよりは若い女をお世話くださいって。

思わず吹き出すツル。

八郎の歌う『もしも嫁にもらうなら』コミカルな動作を交えて。

顔なぞついてさえいりゃ十分
鬼瓦でもお多福でも
慣れればそれもご愛敬
ただ

ツル　ただ？

のっぺらぼうは困りもの
裏と表がわからねえ

ツルがおどけて顔をなぜてみせる。

気立てはいいにこしたことないが
癇癪持ちでも無精でも
慣れればそれも気にならぬ
ただ

ツル　ただ？

色の黒いは我慢もするが
腹の黒いは願い下げ

ツル、大笑い。

八郎　笑うな、ツル。俺は正直そのくらいの望みしかなかった。だからおまえに会ったときは腰が抜けるほどびっくりした。そしておまえが俺のところへきてくれると聞いたときは、その千倍もびっくりして、ほんとうに腰が抜けた。こりゃ、あの娘はきっと夜になると首が伸びて、行灯の油をなめるにちがいない。

ツル　まあ、ひどい。

八郎　そうでもなけりゃ、どうして俺のところへ。

ツル　ほんと、どうしてなのか、わたしにもよくわからないのよ。でもね、おまえさんの顔をみたとき……。

八郎　俺の顔を見たとき？

ツル　ああ、この人がわたしの亭主になる人だと思った。そんなこと、それまでになかったの。初めてだったの。

八郎　でも、嫁に来て、こりゃあしまったと思ったろう。

ツル　ううん、よかったと思ってる。おまえさんのところへ来て、よかったと。

八郎　ほんとうか？

ツル　ほんとうよ。

八郎　ほんとうに、ほんとうか。

ツル　ほんとうに、ほんとう。

にやけている八郎。ツル、八郎の尻をたたいて。

ツル　だから心配なんてしないで、早く畑にいってちょうだい。まだ陽はこんなに高いのよ。

八郎　うーん、だども。

八郎の歌う『ずっと、おまえのそばにいたい』。

なれるものなら　赤い櫛
おまえの髪をかざる櫛
一日　そばにいたいもの
おまえのそばにいたいもの
白いうなじに　貝の耳

はずかしがっているツル。それをやさしくみつめながら、八郎は続けて。

なれるものなら　赤い帯
おまえの腰を抱く帯
一日　そばにいたいもの
おまえのそばにいたいもの
黒子まぶした　餅の肌

八郎　なあツル、おれはひとつだけ残念なことがある。

ツル　残念なこと？

八郎　ああ、おふくろにおまえをみせてやれなかったことだ。おふくろは、さぞかし喜んだことだろう。いい嫁がきてくれたと。

八郎の歌にこたえるようにツルが歌う『やさしい気持ちに包まれて』。

やさしい気持ちに包まれて
いつも春　あたたかな
わたしの季節
やさしいその目に包まれて
そよぐ風　さわやかな
わたしの一日

いつまでもかわらぬと
誓ってほしい
死ぬまで離れぬと
誓ってほしい

やさしい気持ちに包まれて
楽しい夢　しあわせな
わたしの人生

八郎とツルは舞台中央に。『ずっと、おまえのそばにいたい』と、『やさしい気持ちに包まれて』による二重唱。

ツル　でもほんとうに困ったものね。なにかいい手立てはないものかしら。

ツルしばらく思案、そのうちポンと手を打つ。何かいい考えが浮かんだらしい。

3

一生懸命、畑仕事に精を出している八郎。だがときどき休んでは、竹枠に張りつけた紙のようなものに話しかけている。なんとそれは紙に描かれたツルの絵姿である。
舞台の前の方に若者と娘たち。八郎のようすを見ている。

若者Ａ　はあ、まったくあきれたもんだ。

村娘Ａ　ほんと　あきれた。

若者Ｂ　しかしまあ、絵姿とは、こりゃおそれいった。

若者Ａ　女房の顔を見ていないと仕事もできん。だから絵姿を描いてもたせるとは、なんとまあ、八郎の女房殿はたいした利口者だ。

村娘Ｂ　それもその絵の上手に描けていることといったらない。ツルさんの姿そのままの生き写しだ。あれなら八郎さんも、ツルさんと一緒に働いているような気になるだろうね。

若者Ｂ　そうだ、ほんとうにそっくりだ。俺も一枚ほしい。

若者Ａ　情けないこというな！　ほれ、あのだらしない面を見ろ。まるで床の間の掛け軸を拝んでいるようだ。

若者Ｂ　八郎にとっちゃ、さしずめ観音さまの掛け軸だろうよ。

村娘Ｂ　恥ずかしいよ、絵姿なんて。わたしなら、もし亭主が望んでももたせない。

若者Ｂ　絵姿に描かれる顔か。

村娘Ｂ　なんだって！

若者Ａ　そうかい、俺はおまえの絵姿だって捨てたもんじゃないと思うぞ。ツルさんのはきれいなだけだが、おまえのはきっと役に立つ。

村娘Ｂ　役に立つ？

若者Ａ　ああ役に立つ。おまえの絵姿を田んぼの真ん中に置いておく。そうすりゃあ。

村娘Ｂ　そうすりゃあ、なんだい。

若者Ａ　その顔のあまりのこわさに恐れをなし、雀どもがよってこねえ。

村娘Ｂ　なんだい、それじゃあ、わたしの絵姿はまるで案山子じゃないかっ！

怒って若者Ａにつかみかかる村娘Ｂ。

あきれて見ている若者Ｂと村娘Ａ。
若者たちと娘たちの歌『いつでもどこでも会えるのに』（最初の４行は若者たち、次の４行は村娘たち）

遠く離れていればこそ
おまえを偲ぶ　よすががほしい
雲のかたちも　花の風情も
おまえの姿に重なって

なかなか会えぬそれゆえに
あなたを偲ぶ　よすががほしい
雨の降る夜も　月の夜も
あなたの姿をさがしてる

もしもおまえが（あなたが）
紙に描かれた絵のように
たたんでしまっておけるなら
胸に隠しておけるなら
いつでもどこでも会えるのに
誰にも内緒で会えるのに

八郎が女房の絵姿に声をかける。

八郎　なあ、ツル。今日はずいぶんと仕事のはかがいった。ほれ見ろ、あすはもう種蒔きができる。おまえがそこで見てくれてるとな、何かいつもより力がわいてくるし、なぜか、ちっとも疲れねえ。

若者Ａ　なぜか、ちっとも疲れねえだと、へっ！

八郎　さて、早いとこ残りをやっつけて、家へすっとんで帰るから、待ってろよ

若者Ｂ　ああ、聞いていられねえ、尻の穴がこそばくなるわ。

村娘Ａ　わたしは正直うらやましいわ。あれだけ惚れられたら女冥利につきるというもの。八郎さんは相手がたとえツルさんのよ

うな器量よしでなくても、きっと大事にしたことだろう。ツルさんはね、八郎さんがそんな男だと思ったから嫁にきたんだよ。

若者A、B、しゅんとしてしまう。

村娘A　でも、わたしね。

村娘B　どうしたの。

村娘A　いや、なんでもない。

若者A　いいかけて途中でやめるな。

村娘A　なにか、よくないことが起きるような気がしてならないの。

若者B　よくないこと？　なんだ急に。よせよ、やきもちにもほどがあるぜ。

若者A　そうだ、俺たちも八郎のことをあれこれやっかんではいるが、やつがどうにかなればいいなんて思わんぞ。

村娘A　やっかみじゃないわ、心配になったの。何か、よくないことが起こるんじゃないかって、今、八郎さんを見ていたら、急にそんな気がしてきたの。

村娘Aの歌う『何かよくないなことがおこりそう』。

よくないことが　おこりそう
虫が知らせる　不吉な印
一寸先は真っ暗闇
闇夜の烏の鳴き声は
かかあ　かかあと呼ぶような

かなしいことが　おこりそう
風が伝える　不吉なにおい
一寸先は真っ暗闇
闇夜の烏の鳴き声は
かかあ　かかあと呼ぶような

それに応えるように、舞台少し暗くな

る。風がでてきたようだ。バサバサと音をたてるツルの絵姿。突風。絵姿の紙が、空中へふわりと舞い上がる。あわてて追いかける八郎。

八郎　おい、こりゃどうした。戻れ、こら、戻れ。おい、おいっ！

舞台をかけまわるが、やがて絵姿は空の高見に消えていく。

八郎　絵が・・ツルが飛んでいっちまった。おーい、戻れ、戻れ。帰ってこい。

あっという間の出来事に呆然。いつまでも空を見上げている八郎。

若者Ｂ　ああ、もう見えねえ。まるで糸の切れた凧みてえだ。

若者Ａ　八郎の馬鹿が、いくらわめいたところで戻るものか。絵姿なんぞ、また描いてもらえばいいじゃねえか。それをまるで、本物の女房が飛んでいっちまったような騒ぎだ。

村娘Ｂ　あっという間に消えちゃったけど。どこまで、飛んでいくんだろうね。

若者Ａ　あの山越えて里越えて、海まで越えていくかもしれんな。

若者Ｂ　拾ったやつは驚くぞ。

村娘Ｂ　ああ、きっと驚くよ。

若者Ａ　雲にひっかかったら、雷様が拾うかもしれんぞ。

村娘Ａ　おこるよ、よくないことが。

村娘Ｂ　まだ言ってる。

4

畑。八郎が顔を伏せ座り込んでいる。大

きくため息、憔悴しきったようす。
若者A、B、村娘A、B、吾助にオヨネ登場。

若者B　しかし、よりにもよって、あの絵姿が。

村娘B　お城の殿様のところまで飛んでいくなんて。

吾助　八郎もよくよくついとらんなあ。

オヨネ　ほんと、ついとらん。

若者A（村娘Aに）おまえのいったとおり、よくないことが起こった。

八郎の悲しみの歌『風にさらわれて』

意地の悪いは　南風
愛し女房をさらっていった
渡り鳥なら　帰ろうものを
いまじゃ　お城の篭の鳥
寝ては　夢見て
起きては　うつつ幻の
とうに涙も枯れはてた

寝ては　夢見て
起きては　うつつ幻の
ほんに涙も枯れはてた

オヨネ　絵姿がお城まで飛んでいき、殿様の目にとまったのがうんのつきだった。

吾助　殿様は絵姿の美しさにすっかりまいってしまって……。

スポット、殿様が浮かびあがる。吾助の台詞にかぶせるように。

殿様　なんという美しさだ。ああ、こんな女がほんとうにいるのか？　いや、いるに違いない。いなくては、絵に描けるわけがな

いからな。
さがせ！　さがせ！　国中、草の根を分けてもさがしてまいれ。

ツルの絵を眺めながら殿様の歌う『天から降ってくるのは』。

天から降ってくるのは
雨だけじゃない
ららら
世にも稀なる
美女の写し絵
ああ神か仏のお導きか
一目惚れの想いは雨宿り

天から降ってくるのは
雪だけじゃない
ららら
心ふるわす
美女の写し絵
ああ狐狸か天狗のまやかしか
憧れの想いは降り積もる

殿様、絵姿を見ながらため息、すっかり魅せられたようす。

殿様　おう、どうだ、見つけたか。それで？ふむ、絵姿そっくりとな。そうか、でかした、でかした。ほめてつかわす。なに？百姓の女房だと。ええい、かまわぬ。しのごのいわせず、ひっぱってまいれ。

スポット、八郎にも。
ひざまずいて嘆願。

八郎　殿様、後生でございます。どうぞツルを、俺の女房を連れていくのは堪忍してやってください。お城にはきれいなお女中が大勢おりましょう。それをどうして、百姓の女房なんぞをおとりあげになろうという

のですか。
俺はツルが、女房がおらんとどうにもならんのです。どうにもならんのです。どうかどうか、このとおり。

殿様　ふん、どん百姓めが。わかった、金をやろう、金を。おまえなんぞが一生かかっても手にすることができぬ金をやる。そいつで田畑を買え、家を買え。それでよかろう。

八郎　殿様、俺は金などいらん。一銭もいらん。だから女房を、俺の女房をとらんでください。

殿様　百姓、おまえの名はなんという。八郎というのか。おい、八郎、よく聞け。おまえの女房は、おまえにはふさわしくない。いやいや、おまえがあの女房にはふさわしくないのだ。実に、まったく不釣り合いじゃ。月とすっぽん、釣鐘と提灯だ。だいたいあのように美しい女に、あんなぼろを着せて、一日中働かせるとは実にけしからん話だ。宝の持ち腐れとはまさにこのこと。宝とは、それを持つにふさわしい者のところにあるべきなのじゃ。

八郎　ツルが俺にはすぎた女房だということはわかっております。けれど、ツルも俺と一緒を望んでいます。

殿様　ふん、知らぬわ、知らぬわ。そんな戯言。

八郎　他のことならなんでもします。なんでもしますから、どうか女房だけは許してください。

殿様、苦虫をつぶしたような顔で八郎をにらみつけていたが、急にニヤリと笑うと。

殿様　八郎、今、おまえ、他のことなら何でもするといったな。

八郎　は、はい。

殿様　そうか、では、わしがこれからいうも

のを手に入れてまいれ。それができたらおまえの女房はきっぱり、さっぱりあきらめてやろう。

八郎　何をお望みなんでございます？

殿様　いいか、よく聞けよ。わしのほしいのはな、太鼓じゃ。

八郎　太鼓でございますか。

殿様　ただし、ただの太鼓ではないぞ。「たたかんけれど鳴る太鼓」というものじゃ。

八郎　な、なんと申されました？

殿様　二度といわんから、耳をほじってよく聞け。「たたかんけれど鳴る太鼓」だ。

八郎　「たたかんけれど鳴る太鼓」

殿様　そうじゃ。それにな、うーん、「泣きっ面にしかめ面」を加えておけ。

八郎　「泣きっ面にしかめ面」

殿様　わかったな。

八郎　「たたかんけれど鳴る太鼓、泣きっ面にしかめ面」

殿様　そうだ、では、しかと申し付けたぞ。

八郎　お待ちください殿様、そんなおかしなものが、この世の中にほんとうにあるのでございますか。

殿様　八郎、おまえはなんでもすると申したではないか。いいか、三日だ。三日の内に持ってまいれ。もし、できぬときは、おまえの女房を連れていく。

八郎　殿様、そ、そんな無理難題、俺には。

殿様　無理難題だと！　ほお、無理難題か。じゃがな、八郎、これはわしの仕事のうちなんじゃ。

八郎　仕事ですと？

殿様　そう、仕事じゃ。おまえたちは田畑を耕し、種をまき、水や肥えをくれ、草や虫を取る。それと同じように、無理難題を考えて、家来やおまえたちに押しつける。これも殿様の大事な仕事なのだ。

殿様の歌う『無理難題の歌』。

古今東西　変わらぬ真理
人の上に生れた者は
目がまわるほど忙しい
仕事の山は高くそびえる
その中でも　そうさ
一番つらい仕事が
無理難題を考えること
やさしすぎてはつまらない
難しすぎては話にならない
荒唐無稽の匙加減
夜も眠らず思案する

殿様　例えばじゃ、湖の水を全部かいだせ、これは難しすぎる。誰が考えても無理だとわかる。そこでわしは湖の水を桶に一杯くめと命じる。何、やさしすぎると？　そうかな。ただし、水をくむのにザルを使わねばならんとしたら？　要するに匙加減とはそういうことじゃ。

古今東西　変わらぬ真理
人の上に生れた者は
暇なとき以外忙しい
仕事の海で溺れそう
その中でも　そうさ
一番楽しい仕事が
無理難題を考えること
降参されてはつまらない
ほんとにできては話にならない
傍若無人の匙加減
飯も忘れて思案する

殿様　いいか、八郎。三日だぞ、忘れるな、きっとだぞ。

殿様のスポット消える。

村娘Ｂ　ひどいわ。
若者Ｂ　ほんとにひどい。
吾助　無理難題を押しつけて、それができな

きゃ、女房をよこせとは殿様もあんまりだわな。

村娘A　ねえ、いまの「たたかんけれど鳴る太鼓」って何？

若者A　たたかんでも勝手に鳴る太鼓ということではないか。

若者B　太鼓がたたかんで鳴るものか。たたかんでも鳴るのは、お化け太鼓だ。

村娘B　そんなありもしない太鼓を持ってこいなんて。

吾助　殿様は八郎がそんなものを用意できるはずがないことは承知の上だ。承知の上であんなことを言ったのだ。

若者A　それから続きがあったな。ええと、「泣きっ面にしかめ面」だ。オヨネばあさん何だい、そりゃあ。

オヨネ　知るもんかい。意味などあるものか大方、もしものときにいいがかりをつけるためのものじゃ。

若者A　いいがかり？

オヨネ　そうじゃ、もしも、もしも、八郎が「たたかんけれど鳴る太鼓」を用意したとする。

若者B　用意できるのか？

オヨネ　もしも、と言ってるじゃろ。そのとき殿様はきっとこういうだろう。おい、八郎「泣きっ面にしかめ面」はどうしたと。

村娘B　そんなの、ずるい！

若者A　どうあってもツルさんを自分のものにするつもりなんだ。

若者B　泣きっ面にしかめ面になるのは、八郎の方だ。

村娘A　ねえ、どうするの。

若者B　どうするんだ。

村娘B　ねえ、オヨネばあさん。

若者A　なあ、吾助じいさん。

吾助　わしらにもわからん。

オヨネ　だがな、八郎の女房殿は器量が良いだけじゃないようでな。

スポット、ツルに。

ツル　心配しないで、大丈夫だから。そうだおまえさんは急いで蜂の巣をみつけてきてちょうだい。

八郎　蜂の巣をかい。

ツル　そう、なるべく大きいやつがいいわ。その巣に紙を何枚もはりつけて、すっかり包んでしまうの。

八郎　そんなものどうしようっていうんだ。ツル、殿様がご所望なのは太鼓なんだ。蜂の巣なんかじゃない。

ツル　大丈夫。わたしのこと信じられない？

八郎　そんなことはねえ、そんなことはねえけれど。

ツル　それを殿様のところへ持っていけばいいの。これがご所望の「たたかんけれど鳴る太鼓、泣きっ面にしかめ面」でございますって。

八郎　けどなあ。

ツル　それから殿様に、太鼓を鳴らしたいときは、すこし焙ってくださいっていうの。

八郎　焙るのか？

ツル　焙ればどうなる？

八郎　蜂の巣を紙で包んで焙ってやると……そうだな、蜂が怒って一斉に巣から飛び出す……でも、紙に包まれているから外へは出られぬ……紙にぶつかって。

ツル　蜂が紙にぶつかれば？

八郎　ぶつかれば……そうだな、きっと団扇太鼓みてえにタンタンと。タンタン、タンタン、ああ、そうか！

ツル　わかった？

八郎　わかった、わかったぞ。たたかんでも蜂のやつが太鼓を鳴らしてくれるんだ。タンタンタンタンって。これがたたかんけれど鳴る太鼓だ。ツル、おまえは頭もいいなあ。たいした利口者だ。殿様のいうように俺みたいな、提灯ですっぽんには宝の持ち腐れかも。

ツル　おまえさん。（たしなめるように）

八郎　すまん。本心ではない。おまえは俺の宝だ。おお、ところでツル、「たたかんけれど鳴る太鼓」はいいが、続きの「泣きっ面にしかめ面」はどうする？

ツル　それも大丈夫。殿様に太鼓をお渡しするときに、決して中をあけてはいけないといっておくの。

八郎　それだけか。それで「泣きっ面にしかめ面」もいいんだな。

ツル　それでいいの。うまくいくわ、でも……。

八郎　でも、なんだ。

ツル　それだけではすまない気がするの。

ツルの歌う『天から降ってくるのは』殿様の歌った同名の歌と曲は同じだが殿様のは浮き浮きした調子で、こちらは沈んだ調子に。

天から降ってくるのは
雨だけじゃない
るるる
袖を絞らす
つらいしうち
ああ神も仏もご照覧
岸の小舟の頼りなさ

天から降ってくるのは
雪だけじゃない
るるる
心凍らす
つらいさだめ
ああ無慈悲な主の横恋慕
白を黒ともいいくるめ

八郎　ツル、俺、必ずうまくやるから。殿様も太鼓がありゃ、おまえのことはあきらめてくれるさ。

ツル　そうね（うなずくが、心配そうな顔の

まま）

スポット、殿様、八郎。殿様は渡された太鼓を見ている（実際にはなくてもいい）。

殿様　なんだ、これがそうだというのか。こんなものがか。ふん、一向に鳴らんではないか。なんだと、焙ってみろと。

殿様、太鼓を焙る（ふり）。

殿様　お、おお、おお、こりゃどうしたことだ。たしかにタンタンと鳴っておる。たたきもせんに鳴っておるわ。なるほど、「たたかんけれど鳴る太鼓」じゃ。どれ、いったい、どういう仕掛けになっておるんじゃ。

八郎　お待ちください殿様、中をあけてはなりません。

殿様　うるさい、黙っておれ。おや、ずいぶんとしっかり貼りつけてあるな。うーん。

殿様、蜂の巣に貼りつけた紙をやぶるしぐさ。途端に、中から出てきた蜂の群れに襲われ、逃げまどう。以上をパントマイムで演じる。

おろおろしている八郎。

殿様　何だ、これは蜂ではないか。ああ、痛い。あっ、また刺された。こりゃ、ひどいこりゃ、かなわん。痛い、痛い、痛い。助けてくれ！

泣き顔、顔をしかめて、ぜいぜい息をつく殿様。

スポット、ツルに。

ツル　殿様、それが「泣きっ面にしかめ面」でございます。

殿様　ううう。

八郎　そうか、わかった！　殿様の顔が、泣きっ面に、しかめ……（あわてて声をひそめる）

殿様、恐い顔で八郎をにらんでいる。

八郎　と、殿様、これでツルを、女房をあきらめていただけますね。

殿様、やりこめられて、くやしそうな顔をするが、すぐ気をとりなおし、八郎を怒鳴りつける。

殿様　何だと！　わしを、このわしをこんなひどい目にあわせておいてただですむと思うのか。ええい、おまえの女房は連れていくぞ。

八郎　殿様、それでは約束が違います、約束が違う。

殿様　黙れ、黙れ、黙れっ！　約束もくそもあるものか。いいか、八郎、その首をちょんぎられないだけでも、ありがたいと思え！

ツル　おまえさんっ！

悲鳴とともに、殿様とツルのスポット消える。

八郎　ツル、ツル、ツルーっ。返せ、戻せ。ちくしょう、ちくしょう。

わめく八郎、しかし、その声はだんだん弱々しくなる。

5

八郎、『風がさらっていった』の二番を歌いだすが、途中でへたりこむ。その後を、若者Ａ、Ｂ、村娘Ａ、Ｂが引き継ぐ。

性悪な　殿様が
女房をさらっていった
渡り鳥なら　帰ろうが
今じゃ　お城の篭の鳥
寝ては　夢見て
起きては　うつつ幻の
ついに涙も枯れはてた

寝ては　夢見て
起きては　うつつ幻の
ついに涙も枯れはてた

若者Ａ　八郎のやつ、すっかりやつれてしまった。

村娘Ａ　まるで幽霊のよう。

若者Ｂ　飯だってろくに食っちゃいねえ。このままじゃあ、死んじまうぞ。

村娘Ｂ　かわいそう、かわいそうだよ。オヨネばあさん、なんとかならないの。八郎がかわいそうだよ、それにツルさんだって。

オヨネ　ちょっと待て。吾助じいさんが、お城へ行っておるんじゃ。門番によく知った者がおっての。首尾よくツルさんと話ができればいいのだが……わしらじゃダメだがツルさんなら何かいい知恵を出してくれるかもしれん。そう思って、吾助じいさんを使いに出したんだが……。おお、帰ってきたぞ！

吾助、汗を拭き拭きやってくる。みんな一斉にかけよる。

オヨネ　どうだった、じいさん。ツルさんには会えたかい？

吾助　待て待て、少し休ませてくれ。ずっと駆けてきたのだ。ああ疲れた。年寄にはこたえるわい。

村娘Ｂ　じれったいな、吾助じいさん、ツルさんに会えたの？

へたりこんでいた八郎、それを聞きつけると、はねおきて、吾助じいさんにつかみかからんばかりの勢いで迫る。

八郎　吾助じいさん、会ったんですか、女房に、ツルに会ったんですか！

吾助　苦しい、苦しい。いいからその手をはなせ。何も話せぬではないか。

八郎、あわてて吾助をつかんでいた手をはなす。

吾助　会えたよ、ほんの少しだが、ツルさんと話すことができた。

八郎　ツルは、どうしていました。達者でいましたか。

吾助　ああ、達者なことは達者のようだったがなあ。

吾助の歌『羽をもがれた鳥のように』

金糸　銀糸の綾錦
翡翠　珊瑚の髪飾り
孔雀のように装えど
つらい心は隠せやせぬ

羽をもがれた鳥のように
羽をもがれた鳥のように
ただ空を
飽かず見上げているばかり

山海の珍味の数々に
歌や踊りや滑稽や
祭りのように賑わえど
悲しい心は慰めぬ

羽をもがれた鳥のように
羽をもがれた鳥のように
行く雲を

追い掛けているばかり

八郎　ツルよ、ツルよ、つらかろう、せつなかろうよ。

わっと泣きだす八郎、もらい泣きしている人々。

オヨネ　それでツルさんが、何かいい知恵をさずけてくれたんじゃないのかい。

吾助　おお、そのことよ。ツルさんはわしを見つけて、それは喜んでな。八郎に言伝を頼まれた。

八郎　ツルは、なんて、なんていったのですか？

せっつかれる吾助。だが、何かいいにくそうである。

吾助　ツルさんはな、おまえに、「ほうろく売り」の格好をして、お城のそばまでくるようにと。

村娘Ａ　ほうろく売り？

若者Ａ　ほうろくって、あのほうろくか。

村娘Ｂ　あの素焼きの土鍋の、ほうろく？

若者Ｂ　他に、なかろうが。

オヨネ　ほんとうにツルさんは、八郎に「ほうろく売り」になって、城にくるようにっていったのかい？

吾助　ああ、間違いない。俺は絶対もうろくなんぞしていないぞ。ツルさんは確かにそういったんじゃ。

八郎　ほうろく売りにか。

若者Ｂ　ツルさんは、お茶でもほうじようというのかい。

村娘Ｂ　馬鹿だね、そんなのんきな話じゃあるまいに。

若者Ａ　ほうろく売りに化けて城に忍びこみたすけだしてくれということではないか。

若者Ｂ　それは無理だ。例え忍びこめたとし

ても、ツルさんを連れて逃げだすことなどできんぞ。もしご家来衆にでも見つかったら最後、首をちょん切られるか、よくて牢屋行きだ。

村娘A　首を切られる……。

村娘B　牢屋行き……。

おびえる村娘たち。だが、八郎は決然と。

八郎　俺は行く。

若者B　八郎、おまえ。

八郎　俺は行く。ツルがきてくれといっとるのだ。たとえ、首を切られることになってもいい。いまのままでも、俺の首はないようなものだ。それにお城の牢なら、いまよりずっとツルの近くにおれるというもの。

オヨネ　うん、八郎、よくいった。めそめそしていても、何もはじまらん。そうさ、あの利口者のツルさんのことじゃ、何か考えがあるに違いない。いまはそれを信じるしかあるまい。

八郎　オヨネばあさん。

吾助　よおし、そうと決まったらさっそく支度にかかるんじゃ。

全員うなずく。

6

舞台はお城の中。腰元たちが、殿様の奥方さまについての噂話の最中。もちろん、奥方さまとは八郎の女房のツルのことである。

腰元a　ほんと奥方さまはいつみてもお美しいわねえ。

腰元b　ほんとうに。

腰元c　ほんとうに。

腰元d　ほんとうに。

腰元ｂ　でも。
腰元ｃ　でもねえ。
腰元ｄ　でも、一度も笑ったところをみたことがない。
腰元ｂ　いつも寂しそうな顔をしている。
腰元ｃ　いつもため息ばかりついている。
腰元ｄ　ただの一度も笑ったことがない。
腰元ａ　それでもあれだけ美しいのだから、笑った顔はもっと美しいはず。
腰元ｂ　奥方さまが笑った顔が見たいね。
腰元ｃ　うん、見たい。
腰元ｄ　どんなにきれいだろう。

腰元たちの歌。『奥方さまが笑わないのはなぜ』

奥方さまが笑わないのは
なぜかしら
憂いに沈んだその顔に
ほほ笑みの花は咲かず
まるで冬の荒野のよう

奥方さまが笑わないのは
なぜかしら
涙の乾かぬその瞳
輝くような光はなく
まるで冬の夕暮のよう
奥方さまが笑わないのは
悲しみの氷が
溶けぬから
奥方さまが笑わないのは
喜びの種が芽を
出さぬから

奥方さまが笑わないのは
なぜ
奥方さまが笑わないのは
なぜ
なぜ　なぜ　なぜ　なぜ

殿様　なぜじゃ！

いつのまにか殿様が舞台に。以前の居丈高のところはなく、すっかり困っているようすだ。腰元たちあわてて、その場にひかえる。

殿様　いったい、なぜじゃ。なぜ、笑わん。城の暮らしのどこが気にいらんというのじゃ。きれいな着物を着て、うまいものを食って、毎日が祭り、毎晩が宴じゃ。腰元たちにかしずかれ、何もかもやってもらえるこんな優雅な暮らしがあるか、こんな愉快な暮らしがあるか。

ついこのあいだまで貧乏な百姓の女房だったものには、城は天国のはず。それがうちの天女さまときたら、まるで地獄にでもいるような顔をしている。

いや、それでも美しいのだ。十分に美しいのだ。けれど……。

腰元たち　けれど。

殿様　けれど、けれど、けれど、わしが見たいのはあれが笑った顔じゃ。あれが笑った顔は、もっと、もっと、もっと美しいはず

腰元たちがバックで、最初よりずっとおさえた感じで歌う『奥方さまが笑わないのはなぜ』に殿様の台詞重なる。

奥方さまが笑わないのは
悲しみの氷が
溶けぬから

殿様　人を怒らせるのも、泣かせるのも、そんなに難しいことではない。思いきり馬鹿にしてやればいい、からかってやればいいのだ。痛めつけてやればいい。苦しめてやればいい。ひどいめにあわせてやればいいわしには、それができる。たやすいことだ……だが。

奥方さまが笑わないのは
喜びの種が芽を
出さぬから

殿様　笑わせることが、こんなに難しいことは知らなんだ。あれを笑わせたものには褒美をとらすといったら、大勢の芸人たちがやってきて、いろんなことをして見せたおかしな話も聞かせた。なのに、あれはニコリともせぬ。わしも、家来どもも、腰元どもも、居合わせたみんなが腹をかかえて笑っておるのに。あれはニコリともせぬ。

奥方さまが笑わないのは
なぜ
奥方さまが笑わないのは
なぜ

殿様　いったい、なぜじゃ。笑い方を忘れてしまったとでもいうのか。
これ、奥はどうしておる？　どこにおるのじゃ。

腰元a　奥方さまは近ごろ、お城の外ばかりを眺めていらっしゃいます。今もきっと。

殿様　城の外を？　何を見ているのじゃ？

腰元b　はい、いったい何をご覧になっていらっしゃるのですかとうかがいますと。

殿様　何を見ているというのじゃ。

腰元c　物売りを見ていると。

殿様　何だと。

腰元d　物売りでございます。お城の外を通っていく、物売りを見ていらっしゃるのです。

殿様　物売りとな。あれは物売りを見るのが好きなのか。はて、おかしなものが好きなのだな。まあいい、誰か今すぐ呼んでまいれ。

腰元a、b退場。

と、すぐ戻ってくる。何やらひどくあわてたようす。殿様のところへかけよる。

殿様　どうした？　何をそんなにあわててお
る。

腰元ａ　殿様、たいへんでございます。

腰元ｂ　奥方さまが、奥方さまが……。

殿様　あれが、どうしたんじゃ。何があった
のだ、はっきり申せ！

腰元ａ　奥方さまが、笑っていらっしゃいま
す。それはもう大きな声で笑っていらっし
ゃいます。

殿様　なにっ！　まことか。

腰元ｂ　うれしくて、うれしくてたまらない
といった風に、笑っておいででした。

殿様　そうか、それでなぜ奥は笑っていたの
じゃ？

腰元ａ　奥方さま、何がそんなにおかしいの
ですかとお聞きしたところ。

殿様　うんうん。

腰元ｂ　お城の外を通る物売りを指差して、
ほら、あれをご覧、あそこを行くほうろく
売りの格好のおかしいこと、口上のおかし
いこと。

殿様　ほうろく売りとな。たしかに奥はそう
いったのか。

腰元ａ　たしかでございます。何がそんなに
おかしいのか、私どもにはとんとわかりま
せぬが、奥方さまの喜ばれ方は尋常ではあ
りませぬ。

殿様　ところでほうろくとはなんじゃ？

腰元ｂ　素焼きの鍋で、火にかけて炒ったり
蒸し焼きにするのに使います。

殿様　そうか、よし、そのほうろく売りとや
らをここへ連れてまいれ。すぐに行け、見
失うでないぞ！
そうか……奥が笑ったか。

7

同じく城の中。
殿様、その側には奥方のツル。まわりには腰元たちがひかえている。
御前に連れてこられたほうろく売り、汚い着物に手ぬぐいを被っている。実は八郎が変装しているのだが、殿様は気づかない。平伏している八郎。

殿様　これ、そこの物売り。そうかしこまらなくていい。よいか、おまえをよんだのは他でもない。ここにいる奥が、大層おまえのことが気に入ったからなのじゃ。おまえのほうろくを商う姿がおかしいというのじゃ。だから、ひとつ、ここでやってみせてくれ。奥を喜ばせてくれたら、褒美はたっぷりくれてやる。

八郎　とんでもねえことでございます。とてもお殿様や奥方様にご披露するようなものではございません。

殿様　いいからやれ。

八郎　しかし……。

殿様　さっさとやれ、これは命令じゃ！

八郎、おずおずと立ち上がると、踊りながらほうろく売りの口上を歌う。最初はややかたく、ぎこちなく、しかしだんだんのってくると、身振り手振りもおおげさに、舞台を所狭しとかけまわる。

八郎（大声で）　ほうろく売りで、ございます。ほうろくはいらんかね、ほうろくのご用はないか。

八郎の歌う『ほうろく売りの歌』。歌いながらほうろくを割る真似をする。

ほうろくはいらんかね
ほうろくの　ご用はないか

お茶をほうじろ
胡麻いりましょう
腹が立ったら割りましょう
せいせいするよな　いい音だ

ほうろくはいらんかね
ほうろくの　ご用はないか
嫁御買います
姑がにくい
姑にくけりゃ割りましょう
せいせいするよな　いい音だ

ほうろくはいらんかね
ほうろくの　ご用はないか
姑買います
嫁御がにくい
嫁御にくけりゃ割りましょう
せいせいするよな　いい音だ

八郎、繰り返し歌いながら、踊り回る嫁や姑の仕草を真似ながら面白、おかしく。
ツル、それを見てほんとうにおかしそうに笑う。腰元たちもつられて一緒に笑う。奥方の笑うのを見て、殿様はうれしくてたまらない。八郎、腰元たちの手をとり一緒に踊る。

ほうろくはいらんかね
ほうろくの　ご用はないか
下女が買います
主人がにくい
主人にくけりゃ割りましょう
せいせいするよな　いい音だ

ほうろくはいらんかね
ほうろくの　ご用はないか
本妻買います
妾がにくい
妾にくけりゃ割りましょう

せいせいするよな　いい音だ
ほうろくはいらんかね
ほうろくの　ご用はないか
小僧買います
和尚がにくい
坊主にくけりゃ袈裟までも
（おっと違った）
和尚にくけりゃ割りましょう
せいせいするよな　いい音だ

殿様　おうおう、奥があんなに喜んでおる。あんなに笑っておる。美しいのう、美しいぞ。天下一品じゃ。うん、そうだ。

殿様、八郎の手を引いて隅へ。何事か耳打ちしている。

殿様　のう、ほうろく売りよ。ひとつ頼みがあるのじゃ。おまえの着物と手ぬぐいをわしにしばらく貸してくれんか。
八郎　殿様、こんなものをどうされます。
殿様　いいから、貸してくれ。
八郎　とても汚いんで。
殿様　かまわぬ、かまわぬ。
八郎　とてもくさいんで。
殿様　かまわぬ、かまわぬ。
八郎　でも、わたしも裸ではおられません。
殿様　うーん、そうじゃ、その間、わしの着物を着ておれ。な、それならいいだろう。
八郎　はあ。
殿様　はやく、はやくしろ。

殿様と八郎、着物を交換する。
ほうろく売りの格好になった殿様、腰元たちと一緒に歌いながら、踊る。
『ほうろく売りの歌』を一番から殿様と腰元たちの合唱。

ほうろくはいらんかね

ほうろくの　ご用はないか
お茶をほうじろ
胡麻いりましょう
腹が立ったら割りましょう
せいせいするよな　いい音だ

ほうろくはいらんかね
ほうろくの　ご用はないか
嫁御買います
姑がにくい
姑にくけりゃ割りましょう
せいせいするよな　いい音だ

ほうろくはいらんかね
ほうろくの　ご用はないか
姑買います
嫁御がにくい
嫁御にくけりゃ割りましょう
せいせいするよな　いい音だ

ツル、手をたたいて。

ツル　お見事、お見事。それではほうろく売り殿、ひとつ城の外で歌って、踊ってみせてくれまいか。ここから眺めておるから、ぜひお願いします。

殿様　はいはい、奥方さまのお申し付け。ほうろく売りめは、これから城の外へまいります。外でしっかり歌いましょう。踊ってご覧に入れましょう。それではしばしお待ちくだされ。

調子にのって、ほうろく売りの格好のまま殿様は退場。
殿様の格好をした八郎とツル、しばらくみつめあっているが、やがてかけよりかたく抱き合う。

八郎　ツル、わしは、おまえに会いたくて、会いたくて。

ツル　おまえさん、よくきてくれた。
八郎　もうはなさんぞ、もうはなさん。
ツル　わたしも。
八郎　ツルーっ。

涙ながらに歌う二人。２場でも歌った
『ずっと、おまえのそばにいたい』と
『やさしい気持ちに包まれて』。
感きわまって、とぎれとぎれになる。

なれるものなら　赤い櫛
おまえの髪をかざる櫛
一日そばにいたいもの
おまえのそばにいたいもの
白いうなじに　貝の耳

やさしい気持ちに包まれて
いつも春　あたたかな
わたしの季節

なれるものなら　赤い帯
おまえの腰を抱く帯
一日そばにいたいもの
おまえのそばにいたいもの
黒子まぶした餅の肌

やさしいその目に包まれて
そよぐ風　さわやかな
わたしの一日

いつまでもかわらぬと
誓ってほしい
死ぬまで離れぬと
誓ってほしい
いつまでもかわらぬと
誓ってほしい
死ぬまで離れぬと
誓ってほしい

そんな二人をうっとりした表情で眺め

ている腰元たち。

腰元a　あれ、さっきまであんなに笑っていた奥方さまが。

腰元b　泣いていらっしゃる。

腰元c　でも、泣きながら笑っていらっしゃるよ。

腰元d　ほんと。

舞台薄暗くなる。スポット、ほうろく売りの姿の殿様を浮かびあがらせる。

殿様　ああ、さすがに歌い疲れたわ、踊り疲れたわ。これだけやれば奥も満足だろう。さて、城に戻るか。それにしてもこの着物のにおいはたまらんな。うん、何だ。通るのだ、ここを。誰の許しだと？　この馬鹿者、誰にも許しなど受けぬわ。そこをどけ！

殿様、突き倒されるしぐさ。

殿様　貴様、何をする。このわしを誰だと思っている。こともあろうに城主に門番風情が手を出すとは、ゆるせん！　打ち首だ、打ち首だ。何だ、なにがおかしい。ほうろく売りが何を言ってると？　馬鹿め、これは、着物をかえたのじゃ。ほうろくを売っていた？　そうではない、わからんやつだな。わしは、奥を喜ばせるために・・・。

殿様が騒いでいるところへ、オヨネ、吾助、若者たち、村娘たち登場。

オヨネ　あれ、そこにいるのは、ほうろく売りの八郎じゃねえか。こんなところで何してる。

殿様　何だ貴様らは！　貴様らなどわしは知らんぞ。

オヨネ　何をいう。さんざん世話になってい

るオヨネばあさんを知らんだと。

オヨネばあさん、殿様のくびったまをつかまえる。

殿様　無礼者、わしは城主だ！　城主になにをする！

吾助　へえ、門番様。こいつはうちの村の八郎という大馬鹿者です。すこし頭がおかしいもんで。はあ、殿様だと！　まったくとんでもねえことをいう馬鹿だ。どうかお許しください。村へ連れかえって、二度とご迷惑かけねえよう縛っておきますから。

殿様　頭のおかしいのはおまえたちだ！　ええい、みんな、みんな打ち首だ。

なおも暴れる殿様をとりおさえる若者A、B。ひきずって退場させる。最後まで悪態を言い続ける殿様。

オヨネ　しかし、まあ、ツルさんもうまいことを考えたもんだ。

吾助　ツルさんもたいしたもんだが、八郎もよくやったぞ。

村娘A　今頃ふたりとも。

村娘B　うん、きっと。

オヨネ　ああ、よかった。めでたしめでたしじゃ。

村娘A　ところでオヨネばあさん、あの殿様はどうするの？

オヨネ　そうじゃな、しばらく頭を冷やしてもらって。それで悔いあらためてくれればいいが。

村娘B　悔いあらためてくれなかったら？

オヨネ　そのときは、八郎にこのままずっと殿様の代わりをやってもらうか。なあ、吾助じいさん。

吾助　それもいいな。ツルさんがついておるから、立派に殿様がつとまるだろうよ。

大笑いする。吾助、オヨネ、村娘たち

オヨネ　それにつけても、男と女の縁というのは、ねえ吾助さん。

吾助　つくづく不思議なもんだ、なあオヨネさん。

その台詞を合図に舞台、急に明るくなる。ツル、八郎が登場。手をとりあい喜ぶオヨネ、吾助、村娘たち。

城の腰元たちも一緒になって、1場の『不思議なものさ縁というものは』の大合唱。

不思議なものさ　縁というものは
とりわけ　男と女の縁は
結びの神はきまぐれだから
もつれたり　からんだり
なかなか回らぬ　糸車
ああ
だから人の世はおもしろい
人の世は出会い
凸と凹との出会い

ほうろく売りの格好をした殿様が若者たちと一緒に、頭をかきながら登場。合唱の輪に加わる。途中、『ほうろく売りの歌』二番と三番が挿入され、デュエットで陽気に歌い、踊る八郎と殿様。

ほうろくはいらんかね
ほうろくの　ご用はないか
嫁御買います
姑がにくい
姑にくけりゃ割りましょう
せいせいするよな　いい音だ

ほうろくはいらんかね
ほうろくの　ご用はないか

姑買います
嫁御がにくい
嫁御にくけりゃ割りましょう
せいせいするよな　いい音だ

再び、『不思議なものさ縁というものは』に戻り、全員で高らかに歌いあげるなか幕が降りる。

不思議なものさ　縁というものは
とりわけ　男と女の縁は
結びの神はきまぐれだから
もつれたり　からんだり
なかなか回らぬ　糸車
ああ
だから人の世はおもしろい
人の世は出会い
凸と凹との出会い

幕